

ドイツ・ザクセン州の「最も美しい村」における地域再生への取り組み
- 「世界単位」論（高谷好一）アプローチ-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 社会環境学会 公開日: 2021-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤本, 穰彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21949

ドイツ・ザクセン州の「最も美しい村」における 地域再生への取り組み

——「世界単位」論（高谷好一）アプローチ——

藤 本 穰 彦

1. はじめに

1961年8月13日に東西間の国境封鎖のために築かれたベルリンの壁は、1989年11月9日に壊された。1991年のソ連崩壊に端を発した東側世界（ソ連・東欧）の大崩壊と、冷戦構造の終焉という世界史上の大事件から30年が経つ。歴史の磁場となった「東」ドイツの現在をどのように捉えたらよいのだろうか。特に、大きな社会構造変動の影響を受けた農村はどのようになっているのか。

本稿では、ドイツ・ザクセン州に2011年に誕生した「最も美しい村」を研究対象に、生態史観に基づく地域研究アプローチを試みることで、その意味内容を明らかにしたい⁽¹⁾。ドイツには、どのような地域くくりの特徴があるのか。地域的なまとまりは何を共有することで支えられているのか。その地域的なまとまりのなかで、個々の農村や人々の暮らしの自立戦略や資源活用、地域間の共生の作法（共存の仕方）やネットワーキングはどのように成り立っているのか。

以下、次の順に論じる。第2節では、生態史観に基づく地域研究アプローチから、ドイツという地域をどのように捉えるか。とくにドイツ東部の歴史をどのようにおさえていくかにを述べる。この点について、自然地理学者・高谷好一の問題提起を受けて、「世界単位」論（“World Unites” Theory）を本論に即して整理する。テキストとしたのは、次の3冊である：『新世界秩序を求めて』（1993年）、『多文明世界の構図』（1998年）、『世界単位論』（2010年）。第3節では、1982年にフランスで誕生した「最も美しい村」の農村資源計画論について、その方法論のポイントを整理する。第4節では、ザクセンの「最

も美しい村」の農村資源計画論の特徴を示す。以上をふまえて、第5、6、7節では、フィールドワークで得られたデータを分析し、ザクセンの「最も美しい村」における地域再生の取り組みについて、その共有内容(コモン)や中心(求心力となるシンボル)を明らかにする。最後に、ザクセンの「最も美しい村」の可能性と今後の研究課題をまとめる(第8節)。

2. 「世界単位」論と「東」ドイツ

地域をくくるという発想

地域の固有性は、その土地の「生態」によって規定される。こうした地域の捉え方は「生態史観」(an ecological view of land history)と呼ばれる。その際「生態」とは、自然そのものではなく、農耕地や里山のように人間によって作られた自然環境と社会環境の複合として捉えられる。「人間社会の性格決定に対して影響を与えるほどに十分に長期にわたって存在し続けてきた環境は、それが仮に人工のものであったとしても、もうここでは生態と化している」⁽²⁾からである。果たして高谷は、「地域」を、「生態、社会、文化の複合として一つのまとまりに見える地理的範囲」⁽³⁾と定義する。生態を基礎に、その生態に適した生業が生まれ、やがてその恵みとリスクを分有する社会集団や社会構造が発達し、社会規範や価値観、死生観が共有される。「生態を基盤にして、その上に個性的な社会、文化を築いている地域のかたまり」⁽⁴⁾、それが高谷の考える「地域」である。

その場の自然・生態環境に根ざすという意味で、地域には固有性がある。ただし地域は閉じていない。人の移動に伴う接触や交流に開かれている。そこで高谷は、「世界単位」という概念を創作する。高谷によれば、世界単位とは「文明生態圏」であるという。「生態環境と、そこに住んだ人間と、さらにはそこに流入した外文明の複合体」、つまり、「同一の世界観を共有する人たちが住んでいる範囲」が「世界」の単位(World Unit)となる⁽⁵⁾。

高谷が重視するのは、あくまでも「住民自身にとって意味のある地域単位」⁽⁶⁾である。地域住民によって想像され、共有された世界観が重要なのであり、その世界観が創り出している生業や社会集団、社会構造、社会的規範に、その「地域」の姿が表出されている。それをフィールドワークで観察して捉え

ていく。これが「世界単位」論で地域をくくるといふ発想の要諦である。

「世界単位」論アプローチによる地域研究

生態史観アプローチによる地域研究の方法は、今西錦司を中心とする京都大学学術探検隊によって洗練されたものである。今西らは、フィールドに行き自分で経験する、未踏の土地や未知の学問フィールド（霊長類研究や脳科学、こころの問題にも応用）に挑むという探検精神を、学術研究にもち込んだ。

卓越したフィールドワーカーであった高谷もまた、フィールドに浸りながら経験を蓄積し、直観的に「世界単位」論を構想した。こうしたデザイン脳を働かせて類推し、地域の経験や境界、個性を大まかにつかみ取り出す能力（Abduction）がいかにして発揮され、地域研究として結実したのか。

高谷の共同研究者であった人類学者の立本成文は、「世界単位」論の方法（発想）について、次のように書き留めている⁽⁷⁾。

世界単位というのは、たびたび繰り返しているように、必ずしも空間的な拡がりだけではない。むしろ、地域という空間的な拡がりをもとにしてそこに現成されている出来事を解釈して抽出される概念である（この点、高谷は「地と柄」のモチーフで捉えていた）。したがって、世界単位が地域に地域としての意味を与える。世界単位を成り立たせるものについては、生態環境、社会制度、文化表象の3局構造として見る提案をしている。

高谷は、1980年代に「世界単位」論を構想して以来、その捉え方をどんどん更新・深化させていた。したがって「世界単位」の定義や、「世界単位」論アプローチの地域研究方法は未だ確定しているものではない⁽⁸⁾。本稿では、立本の提案も受けて、「世界単位」を次のように捉えて研究を進める⁽⁹⁾。

今では私（高谷）は「世界単位」とは何かと聞かれると、その精神としては、世界観を共有するところである、と答えている。そして、分析的、構造的にいうならば社会文化生態力学的に作り出された一つのまとまり

のある地理学的範囲である、と答えることにしている。

ヨーロッパと「世界単位」ドイツ

高谷はヨーロッパを一つの世界単位のもつとまりとして捉えず、「中央の農地を基盤にした地域と、南北の2つの海（南は地中海、北はバルト海と北海）を舞台にした地域」⁽¹⁰⁾に大きく見分ける。ヨーロッパは、「もともとは森と海の世界、そこに比較的最近になって地中海方面から文明が流入して急速に展開した国々」⁽¹¹⁾から成る。森の世界はドイツであり、中央の平原にフランスが、そして大陸の北西部にオランダ、その先にイギリスという海の世界が広がる。

高谷によれば、ドイツは「森の領邦国家」⁽¹²⁾であるという。領邦国家（テリトリウム）とは、巨大な王国から独立して存在する小さな諸侯国を指し、領邦君主（ランデスヘル）によって支配される小国である。歴史学者の鯖田豊之によれば、「いちばんひどいときは、総計300ぐらいの領邦君主と帝国都市がドイツを分割した」⁽¹³⁾、といわれている。中央集権ではなく、小規模分散の領邦国家がドイツに育った生態基盤について、「何せここ（ドイツ）は山地や丘陵で、バリ盆地のような平坦地がないから大勢力の育つ生態的な基盤がない」⁽¹⁴⁾と、高谷はいう⁽¹⁵⁾。

ゲルマン世界は森が広く、町の少ないところである。ライン川ぞいだと、まだ谷筋には点々と町が続くのだが、それより東に入ると町は少ない。丘陵が多く、そこが多くは森と牧草地で覆われている。これが典型的なゲルマンの世界である。

「東」ドイツ

東部ドイツとはどのような場なのか。歴史的にみれば、東部ドイツは、「ヨーロッパ」の歴史を胎動させた故地でもある。375年に、中央アジアの遊牧騎馬民・フン族が西進して、東ゴート族を征服させるや、その隣にいた西ゴート族は、ローマ帝国の保護を求めて、大挙してドナウ河を越えた。ノルマン以外のほかのゲルマン民族もそのあとを追った。いわゆる、ゲルマン民族の大移動である。

鯖田は、「ヨーロッパの形成は、文化的には、大移動にふみきったゲルマン民族が、ローマ社会やガロ・ローマ社会に蓄積されていた進んだ文化に接触し、それを取り入れる過程だったのであるまいか」⁽¹⁶⁾、と問いをたて、「ゲルマン民族の大移動は、ヨーロッパの歴史の出発点だった。かれらの大移動がなければ、ヨーロッパ人種もヨーロッパ世界も形成されようがなかった」⁽¹⁷⁾、と結論づける。

移動と人種混血をすすめたゲルマン民族が、ギリシャ以来の古典古代文化やキリスト教文化と出会い、それらを吸収するなかで、「ヨーロッパ」の原型がつくられていった。果たして、870年のメルセン条約で、ドイツ（東フランク王国）、フランス（西フランク王国）、イタリア王国の3国の基本的なまとまりが出来たのち、911年にドイツ王国、987年にフランス王国がそれぞれ成立する。

ゲルマン民族の大移動後、「空白」地帯となっていたエルベ河より東には、スラヴ民族が進出していた。カール大帝をはじめゲルマン民族は、幾度となく失地回復をはかったがうまくいかなかった。12世紀初頭には、エルベ河がスラヴとゲルマン両民族を分ける境界線のようにになっていた。

12世紀後半にかけて、ゲルマン民族が東方への進出に再び成功する。エルベ河からオーデル河のあいだがドイツ系諸侯の支配下にはいり、ドイツからの移民が流入した。オーデル河は、現在のドイツとポーランド（スラヴ）の国境線となっている。その後も、ドイツは、バルト海沿岸に「建設都市」化をすすめ、14世紀末には、ドイツ人の居住区は従来の1/3ほど拡大した、と言われている。この歴史的な動きは、「東ドイツ植民運動（ドイツの東方運動、ドイツ人の東方居住）」、と呼ばれる⁽¹⁸⁾。

第2次世界大戦後の1949年、ドイツ東部には、旧ソビエト連邦の占領地域として「ドイツ民主共和国」（Deutsche Demokratische Republik：DDR）が建国され、それが1990年まで続いた。第2次世界大戦の激戦地となっただけでなく、この地域は、冷戦下の社会経済の大きな変動にさらされた経験をもつ。

1945年7月17日から8月2日にかけて開催されたポツダム会議では、ソ連占領下のうち、東プロイセンの北半分をソ連が管轄する以外、オーデル河・ナイセ河をドイツとポーランドの国境として、オーデル・ナイセ線以东がポ

ーランドに引き渡されることが決まった。第2次世界大戦の敗戦から1950年までに、このかつての東部ドイツ領から約430万人のドイツ人が追放され、ソ連占領地区の東ドイツはその多くを受け入れた⁽¹⁹⁾。

1989年のベルリンの壁崩壊と「平和革命」(エーハルト・ノイベルト)⁽²⁰⁾によるドイツ再統一、1991年のソ連崩壊に端を発した東側世界(ソ連・東欧)の大崩壊と、冷戦構造の終焉という世界史上の大事件の磁場ともなった⁽²¹⁾。

では、「森の領邦国家」という生態史観的特徴を有するドイツにおいて、その地域的なまとまりのなかで、個々の農村や暮らしの自立戦略や資源活用、地域間の共生の作法(共存の仕方)やネットワークキングの仕方は、現在どのようになっているのだろうか。歴史が複合し、ヒトや民族が混じり合う場である「東」ドイツ・ザクセン州において成立したネットワーク、ドイツ・ザクセンの「最も美しい村」について論じていこう。

3. 「最も美しい村」の農村資源計画手法

「最も美しい村」、フランスで生まれる(1982年)

ザクセンの「最も美しい村」の分析にうつる前に、まず、「最も美しい村」の農村計画手法を確認しておきたい。世界で最初に「最も美しい村」のネットワークが誕生したのは、1982年の「フランスの最も美しい村」(Les Plus Beaux Village de France)である。フランスの農村では、1960年代以降過疎化が深刻になり、1980年代には無人化する村やコミューンが現われはじめていた。1981年に、フランス南西部のコロンジュ・ラ・ルージュ(Collonges la Rouge)の村長(当時)であったシャルル・セイラック(Charles Ceyrac)は、「地方の砂漠化」(de désertification rurale)に対抗する戦略を考えていた。

ヒントとなったのは、リーダーズダイジェスト社の「フランスの最も美しい村」というテキストであったという。この本には遺産の保護とコミュニティ経済を両立する100の村がリストされていた。セイラックはすべての首長にレターをだし、そのうち66村からレスポンスがあったという。1982年3月、セイラックはこれら66の首長と共に「フランスの最も美しい村」連合を設立した⁽²²⁾。2020年11月現在、「フランスの最も美しい村」連合には、159村が加盟している。

応募にあたっては、1) コミューンが都市化されていないこと、言い換えれば、人口が概ね2,000人以下であること、2) 国が指定する歴史的建造物や保存サイトが、少なくとも2つ以上あること、3) 議会での承認を受け、多数に公式に支持されていること、の3条件がある。

フランスの「最も美しい村」では、「12、13世紀頃の、中世の景観を守ることが1つの大きな基準であり、国によって公的に指定された遺産の保護を核として、その村の街並みの調和と統一感を守る」ことが目的とされている。12、13世紀のヨーロッパは、「中世農業革命」(950～1150年)が完成し、フランスで村域の範囲がかたちを成してくる時期であり、並行して、流動化した人々が城壁内(将来の都市)になだれ込み、手工業や商業の発展が胎動する時期でもある。フランスの「最も美しい村」が注目する12、13世紀というのは、このようにフランスの農村の原型が中世農業革命を経て出来上がる時期であり、並行して、封建領主の支配する都市が分散して成立する時期でもあった。この時期に建設・再建された城砦や城壁、教会は、フランスの歴史遺産に登録されている。それらを中心とする地域的まとまり=「村」(Village)を、フランスの「最も美しい村」は守っている⁽²³⁾。

「最も美しい村」のグローバル・ネットワーク

1982年にフランスで生まれた「最も美しい村」は、こんにち、グローバルに拡大している。フランス(1982年設立)、ベルギー・ワロン地方(1994年設立)、カナダ・ケベック州(1998年設立)、イタリア(2001年設立)、日本(2005年設立)、スペイン(2011年設立)が、世界の「最も美しい村」連合としてネットワークを組み、ロシア、ギリシャ、ドイツ・ザクセン州、ルーマニア、レバノン、スイス・リヒテンシュタインが準加盟・オブザーバーとしてネットワークングしている。このほか、中国や韓国、インドネシア、インド、ベトナムといったアジア各国からも関心が寄せられている。

いずれの地域においても「最も美しい村」への取り組みは、地域住民の生活を中心に、その地域の自然環境とそれに基づく第一次産業を中心に社会環境・生活圏・交流圏とリンクし、地域の自治・自立を目指すものである。観光や移住の促進等の交流についてもそうした視点からの取り組みが重視され、国境を越えたネットワークが形成されている。

各国の「最も美しい村」は、すべて非営利組織（NPO法人）による運営であり、それぞれの国で選任された「最も美しい村」の認定委員によって審査・格付けされている。審査項目や評価指標は、フランスの評価基準をレファレンスとして、詳細は各国で決められている。その際にも、地域住民の生活に注目し、（歴史）遺産を守り、持続可能な発展を実現する、小さな村のネットワーク・連合を形成するという目標を共有している。資格委員が審査し、品質を保証・管理するという「最も美しい村」の農村資源計画手法も共通する。

「東」ドイツ・ザクセン州に誕生した「最も美しい村」は、まだ正式加盟の基準をクリアしていない。しかしながら、ネットワークの加盟を目指す個々の村々では、地域の自然・生態環境の再生、歴史的建造物の修復、移住・定住の促進等の活動を通じて、地域再生の試みが胎動している。こうした「最も美しい村」を目指すザクセンの「最も美しい村」が、地域の固有性を表現するために自然・生態環境をどのように捉え、何を地域再生のシンボルにしているのか。いかなる地域資源が、村の自立戦略に活用され、ザクセンの「最も美しい村」としての地域イメージ形成に応用されているのか。次節では、ザクセンの「最も美しい村」における地域の再生、自立戦略や資源活用、ネットワークのあり方を分析していきたい。

4. ザクセンの「最も美しい村」の農村資源計画手法

ドイツ・ザクセン州の「最も美しい村」（2011年）

ドイツ・ザクセン州（Sachsen）の「最も美しい村」（Sachsens Schönste Dörfer）は、2011年に誕生した。ザクセンでは、エルベ河の流れに沿うように町が形成され、山と森のなかに小さな村々が点在する。村は、州内に約3,300村あり、ゲルマンだけでなく、フランクやスラヴィックのルーツをもつ村も多い。このようにゲルマン、フランク、スラヴの混じり合う文化と社会、折り重なる土地と人（移動と人種混合）の歴史を守る運動として、ザクセンの「最も美しい村」連合は結成されている。2019年9月時点で、オーパーケンナースドルフ（Obercunnersdorf）、ヒンターヘルムスドルフ（Hinterhermsdorf）、シュミカ（Schmika）、シュラークヴィッツ（Schlagwitz）、スタンゲングリュン（Stangengrün）、フラン（Franken）、ドレイスカウ・マッカ

ーン (Dreiskau-Muckern), ヘフゲン (Höfgen), オーターヴィッツ (Auterwitz), ローレンツキルヒ (Lorenzkirch), ナウシュタット (Naustadt) の11村が加盟している (図1)。

ザクセンでは、5,000人を超えると町 (Town) となるため、「村」の規模は5,000人以下である。実際は、200~300人程度のまとまりであることが多く、加盟村のなかには4世帯という村もある。加盟村では、比較的大きな村でも700名程度であり、村のカテゴリーのなかでも小さな村から、ザクセンの「最も美しい村」連合は構成されている。

ザクセンの「最も美しい村」連合の設立にあたっては、ザクセン州・環境省職員のマーカス・ティーメ (Markus Thieme), 都市計画・地域開発コンサルタントのヨハネス・ヴァン・コルフ博士 (Dr. Johannes von Korff), オーバークンナースドルフ村のジョセフ・ケンピス (Josef Kempis) 村長が中心となって発起人となり、今でも中心メンバーとして運営に参加し、彼らを各加盟村で「最も美しい村」づくりを担う住民が支えている。

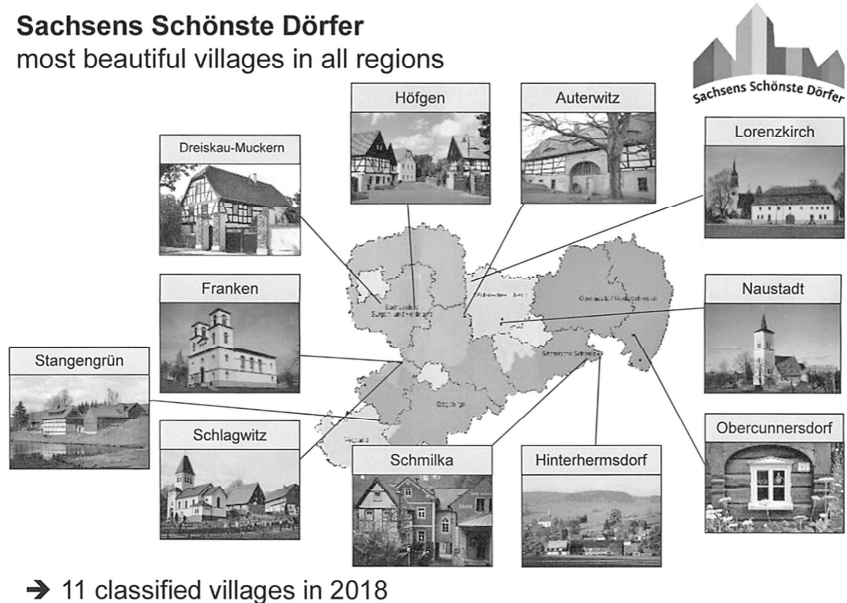


図1 ザクセンの「最も美しい村」の加盟村。右上はロゴマーク。
(2019年9月24日収集資料)

地域資源

ザクセンの「最も美しい村」連合は、混じり合う東ドイツ地域に象徴的な、伝統的建築物の保全と再生に力を入れている。ザクセン州南部から東部のチェコ、ポーランドと国境を接するエリアには、“Umgebinde haus”と呼ばれる、コネクティングハウスがある（写真1）。

このコネクティングハウスの建築様式は、12世紀にゲルマン系の民族がこのエリアに入り直した頃に端を発し、13～15世紀の間に完成したと言われている。1階部分は、スラヴ様式の石組み基礎（薪ストーブをこの部分に設置する）と木造のログルームから成る。この一階部分を木造ラッピングして基礎を組み（Umgebinde）、その上に、2階と屋根裏をドイツ様式の半木構造（Half-timber Style）で組み上げていく。材料は、石材、木造、藁、土（粘土性の高いローム層）であり、いずれも村の周辺から調達される、自然由来のも



写真1 オーバークンナースドルフ村での滞在時に宿泊したコネクティングハウス。ゲストハウスのような簡易宿泊所となっていて、2階の個室に宿泊した。1階はケーキ屋で、ログルームはカフェとなっている。その1階スペースで朝食を取った。薪ストーブの温かさが行きわたり、やわらかく、あたたかい空間であった。（2018年3月9日撮影）

のがそのまま使用される。屋根や外壁もまた、平タイルと石板を組み合わせたローカルな素材から作られたものが使用される。

オーバークンナースドルフ村のケンピス村長によれば、「この村で一番古い Umgebende haus は、1580年に建設されたものがある。今でも人が住んでいる」⁽²⁴⁾、という。ケンピス村長は、伝統工法のリノベーション工務店を経営する経営者でもあり、息子と職人たちと共に、オーバークンナースドルフ村のあるコトマル (Kottmar) エリアを中心に、Umgebende haus の再生と保全に取り組んでいる。この修景活動により、村の景観の調和と統一性が高まり、近年、ヨーロッパ各地から観光客が訪れる村となってきている。

移住・定住者の受け入れ

ザクセンの「最も美しい村」連合は、移住者を受け入れる仕組みづくりと移住希望者へのプロモーションに力を入れている。1990年の東西ドイツ統一以降、DDR時代に各村にあった小さな手工業の工場が、自由化によって閉鎖され、仕事がなくなった。また、ダンスホールや集会場等の大型建築物は、競売に出された。村外、国外の投資家が購入したものの、その後メンテナンスがなされず、所有者と連絡が取れなくなり、倒壊の可能性があるものの村側ではどうすることもできない、という建物も多いという。この点について、コルフは次のようにいう⁽²⁵⁾。

DDR時代は、貧しくとも村に工場があり、仕事があった。村で人々は生活していた。統合後の自由化によって、多くの村で工場が倒産した。仕事がなくなり、若者は住めなくなった。子供が生まれないから学校もない。農地も自由化した。いっけん、農業が豊かな村に見えても、農地の所有者は村の人でない場合も多い。「西」ドイツや国外の投資家が農地を購入して大規模に農業を行っている。農業は盛んだが人は住んでいない村もある。統合後は、西側からの社会資本投資によりインフラが格段に良くなった。村に暮らしていても、毎日車でドレスデンやライプツィヒ、イエナへ働きに行くことができる。高速道路が村と都市をつなぎ、危ういバランスで共生させている。それが今のザクセン州の都市と農村の関係である。

ザクセンの「最も美しい村」は、EU 共通地域政策とも連携しながら、「最も美しい村」への移住希望者のための相談会を開催している。その方法は、再生したコネクティングハウスで、それを再生させた住民が主役となった相談会を開催する、というものである。空き家をどのように取得し、どのような方法で修復していったのか、実際にその家のなかで、建物に触れながら説明がなされる（写真2）。

そのあとで、村のなかの他の移住者の家を見てまわったり、村を歩きながら、村に残る伝統建築物の空き屋を紹介したり、水の利用や畑の状況、上水道・下水道の整備状況、その村の農業や地域の産業について住民が説明し、意見交換する。



写真2 オーターヴィッツ村で開催された、移住希望者のためのワークショップ。移住者によって改装されたコネクティングハウスの屋根裏を開放して開催された。奥のポスターは、ザクセンの「最も美しい村」連合のもので、最初の全体あいさつで連合の理念とミッションが説明され、個別の面談では、他の村の様子も説明されていた。（2019年9月28日撮影）

再生したコネクティングハウスに戻って、伝統工法の職人を集めた技術の意見交換会が開催され、改修の実演を兼ねたワークショップが行われる。ワークショップのあとは、村の中心にあるパン工房 (Backhaus) に集まって、パンを焼き、コーヒーを淹れ、ワインを飲む。生活や仕事の相談に乗り、村のすべてを案内する。まる一日をかけてゆったりと丁寧に交流していく。

こうしたことを積み重ねながら、ザクセンの「最も美しい村」に暮らす人々が、少しずつ、増え始めている。

5. 地域の固有性を決めるものはなにか ——水のゆくえでは見分けられない

ザクセンの「最も美しい村」は、自然・生態環境をどのように捉え、いかに反映しているのだろうか。高谷は、「ヨーロッパには随分自然が残っている。かつては生態型の世界単位を作っていたのではないかと思う。……中略……ヨーロッパの本来の姿は生態で区分される世界だったのではないか」⁽²⁶⁾、と述べている。そこで、ザクセンの「最も美しい村」に残る自然を見てみよう。はじめに注目したのは、水のゆくえであった。

しかしながら、東南アジアや日本のように再生する自然に取り巻かれて成立している村々と比べると、ザクセンの「最も美しい村」の固有性を水のゆくえに求め、読み解いていくことは難しかった⁽²⁷⁾。ザクセンでは、「水が無い」ところにも村がある。村と村をつなぐ街道のあちこちに給水塔が立ち並び、地中には水道管が張り巡らされている。

ヨーロッパ(イギリスを除く)では、河川は舟運の場であり、川の水は飲み水ではなかった。産業化による都市への人口集中もある。近代都市の成立は、城壁を撤去することからはじまった。軍事技術の進歩で城壁が都市防衛に有効ではなくなったこともあるが、産業革命が都市に人口を集中させたからである。都市が増大する人口を吸収し、その受け皿を再構成するには、城壁を撤去し、周辺農村を併合して市域を拡大することが急務であった。

城壁に代わって、「都市」の範囲とイメージを規定するようになったのが、「水道」(=水の利用を共有した共同体としての都市)の整備である。水道を共有基盤とした都市共同体の再構成について、鯖田は次のように述べる⁽²⁸⁾。

注目されるのは、新・旧の市域に上水道の集中給水の配管と下水道建設の工事が並行してすすめられていることである。かつては都市壁に囲まれたのが市域だった。今や、水道と下水道が通じているのが市域だとの観念が生まれた。

もちろん今日では、水源の分散、伏流水の利用、地下水の利用等、地域の条件に合わせた水利用のかたちを観察できることもある。とはいえ、村と村のあいだ、村へと続く丘の上には給水塔が立つことも多い。いくら距離が遠くても、良質で安定的な地下水や泉水の水源を確保し、それを集約導水して末端まで配分するという、古代ローマ以来のヨーロッパの水道思想が、未だにあちこちで見られる⁽²⁹⁾。

水が地域のコモンではないとしたら、ザクセンの「最も美し村」では、地域の固有性は何によって規定されているのか。その村に暮らす人々は、なにを頼りにして、いかなるイメージや世界観を共有し、地域的なまとまり、ローカル・アイデンティティを構成しているのだろうか。水のゆくえではない見方で、コミュニティの中心を捉える必要がある、それが最初の発見であった。

6. コミュニティの中心としての「食」

仮説的な観察であるが、コミュニティの中心（地域再生の核）には「食」が特別な意味をもっているようだ。例えば、オーターヴィッツ村では、コミュニティの拠点として、村の中心にパン焼き小屋が再生された（写真3）。DDR時代には、配給された小麦を持ち寄り集めてパンを焼くことで、「増やしてから」分けていたという。村を去る人々が多くなって、その習慣が無くなっていったが、移住者が増えてきたことで、パン焼き小屋を修復し、今ではまた毎週集まって小麦を出し合い、様々な種類のパンを焼き、それを村人や来訪者と分かち合っている。パンが焼かれる週末には他出者も戻ってきて分かち合う。

「子どもの頃、自分の好きな色とりどりの具をのせて、自分だけのピザを焼いた思い出がある。それが懐かしくて、ずっと好き。今はこの村に住んでい



写真3 オーターヴィッツ村にて。再生したパン焼き小屋に掛けられたプレート。
(2019年9月28日撮影)

ないけれど、パン焼き小屋が再生したことで、還る場所が出来た気がした。近いうちにこの村に帰ってきたい。そのためにこの村の近くで仕事を探し始めたんだ」と語ってくれた若者とも出会った⁽³⁰⁾。

食のコミュニティという視点について、別の事例をみてみよう。スタンゲングリュン村は、キルヒベルクの自然保護区内の標高400~500mほどの谷筋にある。1200年頃にフランクからの移住者によって入植されたこの村には、現在600人ほどが暮らす。1990年の東西ドイツ統一以降、周辺部の人口が30~35%減少したなかで、この村の人口はほとんど変わっていない(2%程度のマイナス)⁽³¹⁾。もっとも、その当時の人々・家族がそのまま世代を継承して暮らしているというわけではない。

スタンゲングリュン村の産業についてしてみると、1945年に100軒の農家があったが、現在では専業農家が5軒(牛や山羊、羊の育種・交配を主とする畜産農家、搾乳農家も1軒ある)、兼業農家が11軒である。地域産業としては、1923年創業のエバート&ヴァイクセル(Ebert and Weichsel)社(家庭用

ブラシや掃除道具を製造する)では、33人の職人が正規雇用されている。その他、給食やスーパー流通に供給するパン工場が、出身者によって村内に操業された。その工場の一角には、住民向けのパン屋がオープンし、雑貨屋と美容室も併設されている。

定住・移住促進のための住宅が、約20世帯分建設され、入居者で埋まっている。1773年に建てられたコネクティングハウスを、伝統建築の職人が移住して改修した。

地域の産業と村の生活を守り、新たに再生したスタンゲングリュン村は、ドイツ中央政府が主催するコンテスト「私たちの村には未来がある」(Unser Dorf hat Zukunft)で、2015年に入賞、2016年にはシルバー・メダルを獲得した。こうした近年の村の「発展」について、この村の出身で、アメリカ・ニューヨークで建築家として活躍し、子育てのためにUターンしてきた女性が、村を歩きながら、一つひとつ英語で教えてくれた。

スタンゲングリュン村では、医師のディートハルト・ヴァイヒセル先生(Dr. Diethard Weichsel)のお宅にホームステイした。彼は、この村に生まれ、DDR時代も医師としてこの村で過ごした。今も診療所に勤めている。統一後、彼は、農家であった生家を改装し、村の農機具や古道具を集めて、「地域農業博物館」をオープンした。

その道具を使っていた人の写真や思い出、彼自身の家族との思い出と共に展示された「モノ」のコレクション、それにまた、ヴァイヒセル先生がその用途を実演しながら説明を加え、息を吹き込む。「地域農業博物館」の入り口、中央のスペースはオープンになっており、来客があれば、机を並べて食とワインを持ち寄り、それが尽きるまでおしゃべりをする(写真4)。生きた食と農の「生活博物館」(Living Heritage)である。

この村には、幼稚園があり、高齢者のためのデイケアセンターがある。1317年建設のセントメリーズ教会では、村の音楽団がいつも活動している。1911年結成の消防団は、今も村の主役として、クリスマス行事を取り仕切る。カフェを併設する花屋“Zum Hakenhof”では村の人々がくつろぎ、村の入り口にある1901年創業のレストラン“Talmühle”に集まれば、レストランのオーナーが育てた牛を「子どもの頃から変わらない」と味を思い出しながら食べる⁽³²⁾。

スタンゲングリュンの村人は、来訪者を迎え、食を持ち寄り、ワインが尽



写真4 家庭料理が持ち寄られ、村の人たちが入れ替わり立ち代わりやってくる食と農の「生活博物館」。「日本から大学の先生がやって来た」ということで、イエナに下宿する大学生の娘さん呼び戻して連れてきた方もいた。(2019年9月26日撮影)

きるまで飲み交わす。最後に、村を紹介するプロモーションビデオを一緒に見る。幼稚園の子どもたちと共に遊び、教会で歌を歌う。パン屋さんやカフェ、レストランがにぎわう。こうしたにぎわいのなかで、過去と現在が混ざり合っている。

食のコミュニティを再生することで生まれたにぎわいは、自給の喜びに根ざした、地域の自立の意志と豊かさの象徴とも考えられる。食のコミュニティが交流を開いていく。そのことによって、また、自分たちの暮らす「地域」の世界観を再確認し、アイデンティティを再構成していく。自立の意志を強くもつ人々が創り出す暮らしが、村を再生させ、ザクセンの「最も美しい村」のかたちとリズムを整えている。

7. 村の再生から、交流まちづくりの創出へ

村の再生

ライプツィヒに近い、ドレイスカウ・マッカーン村は、廃村の危機から再生した村である。1950年代以来、鉱業法に基づいて管理された村で、エスペンハイン・オープンキャスト鉱山の拡張的な開発のために、住民が計画移転した村である。1980年代の東ドイツはソ連との関係悪化から石油が不足し、エネルギー源として褐炭の利用が増大していた⁽³³⁾。褐炭は広くストーブとして暖房熱源に大量に利用された。特にライプツィヒやハレのような南部の都市工業集積地では、生活由来の褐炭ストーブの煤煙と化学コンビナート由来の汚染により、大気汚染、大気汚染による森林破壊、地下水汚染、河川汚濁といった環境危機が深刻化していた⁽³⁴⁾。



写真5 庭で採集したベリーから作った季節のジャムを説明する農家。
(2018年3月8日撮影)

DDR時代が終わり、村の再生に着手した時の人口は50名程度であったという。その後、再生計画をつくり、人々が移住し、村を再生し、幼稚園もでき、子供たちの声が賑やかに響く村となった。村内には、アート・イン・レジデンスのコンセプト・デザインのもと、そこに暮らすアーティスト自身によって再生されたコネクティングハウス群もある。アーティストにとっては、広い創作スペースを確保し、創作的な暮らしと子育てを整えられる。こうして現在では400名程度が暮らしている。

様々なベリーを植えてジャムを手づくりする農家があり、幼稚園ではオーガニック給食のメニューづくりが行われていた。手づくりとオーガニックで暮らしをつくることから地域が再生されている様子を観察することができた(写真5)。

交流まちづくりの創出へ

観光・交流に注目してザクセンの「最も美しい村」をみると、宿泊を伴う滞在としては、簡易的なステイか農家民泊、ホームステイが主であり、宿泊先が十分に整備されているわけではない。それぞれの加盟村のあいだは、地図上ではそう遠くない距離にあるのだが、エルベ河とオーデル河の源流域が重なる入り組んだ森に分散して存在しており、1日にいくつも回ることはできない。谷を下り、平原に出て、高速道路を使って横断し、また谷を上っていく。公共交通機関は発達しておらず、車での移動が基本である。そして、すべての道は都市に向いている。したがって、実際には、ドレスデンやライプツィヒ等の都市を起点として、目的地を定めて、1日に1つ、日帰りで訪れるスタイルが一般的となる。

宿泊先の特徴があるのは、ナウシュタット村のホテルSchloss-Scharfenbergであろう。ドレスデンからエルベ河に沿ってしばし下ると、マイセンに着く。マイセンに隣接するナウスタッド村の入り口、エルベ河を見下ろすところにホテルは在る。18世紀に建設された城砦だが、メンテナンスされておらず、屋根が崩れ落ちていたところを、現オーナーが買い取り、修復を開始した。静かな森に囲まれて、川から上がる朝霧のなか、城内を散歩した。2018年3月当時はモニター宿泊で、多くの部屋が修復・改修中であったが、現在は正式にオープンし、結婚式やセレモニーにも使われている。また、こ

の村では、村の中心に位置する教会の修復とその周辺景観の整備が進められていた。入り口と中心の景観を修景することで、村の誇りを再生しているようであった。

加盟村のなかには、村全体を観光地化しているものもある。ドレスデンからエルベ河をチェコとの国境線まで上っていく。ザクセン・ボヘミア・スイス国立公園の入り口にあるシュミカ村である。

シュミカ村では、自家製ビールの醸造所とワインセラーが整備され、レストラン、ホテル、バー、自家製酵母のパン屋やピッツェリアが建設されており、長期滞在用のアパートメントもある。洞穴をリノベーションしたワインセラーもある。エネルギー面でも太陽光と木質バイオマスを活用したクリーンエネルギーで、村内を走る作業車は電気自動車であり、お湯は薪で沸かされ、暖房も薪ボイラーであった(写真6)。

2018年3月に訪れた際には、冬場の観光客受け入れのために、フィンランド・サウナとホットストーン・マッサージ施設が建設されたばかりで、併設



写真6 シュミカ村を案内してもらい、開発コンセプトの説明を受ける。お土産に大量のクラフトビールをもらったが、帰国当日のことであり、飲み切れなかった。(2018年3月10日撮影)

の温浴施設も完成していた。また国立公園内の冬用のトレッキングコースを整備し、ガイドも常駐していた。冬場にも関わらず多くの来客で賑わっており、近隣のホテルも満室であった。

ゴルフは、「シュミカ村では、起業家が村に移住して、それなりの資本を投入してコミュニティ・ツーリズムのビジネスを立ち上げた。地域資源を活かして、価値を生み出している学びの多いモデルで、食・住・ツーリズムが複合した地域開発であり、今までにない特別なケース」⁽³⁵⁾、と評価している。「最も美しい村」への移住者のなかには、コミュニティ・ビジネスを立ち上げる計画をもって、そのチャレンジを実現する場所を探している者もいる。

8. むすびにかえて

本稿では、ドイツ・ザクセン州の「最も美しい村」を事例に、建物や文化の修復から、移住・定住者を呼び込み、丁寧に地域を再生させていく様子を分析してきた。フィールドワークの途中、村から村へと続く街道に植わるりんご並木や家庭の畑に立つ手づくりのハウスといった冷戦時代の地域の食の厳しさを伝える景観に目が行く。廃屋となったまちの集会場・ダンスホール、DDR時代の官製・手工業の廃工場、その従業員のために建設された集合住宅跡の景観は、どの村にもあった。「鉄道駅」をリノベーションしたというカフェで、車を停めて朝食をとった。第2次世界大戦末期に、ドイツ軍が撤退する際に橋梁や線路を爆破していったそうで、線路はどこにも無かった。食事を終えて説明を受けるまで、そこが駅だとは気がつかなかった。

ザクセンの「最も美しい村」には、チェコやポーランドと直接的に国境を接している村も多い。国境をめぐることは、例えば、労働市場をめぐる、国境を接するチェコやポーランドをはじめ東欧からの外国人労働者をいかに受け入れるかという問題がある。東西ドイツ統合直後の国境辺境地域 (Zonenrandgebiet) では、東欧からの労働移住者と旧東ドイツからの移住者が職をめぐる競争した経験がある⁽³⁶⁾。戦争で国境線が書き換えられていった際の地域へのインパクトや、冷戦時代の社会経済構造とその後の変動を丁寧に見ていかなければ、こうした「問い」は解けないのかもしれない。

ただし、ザクセンの「最も美しい村」のフィールドワークからは違う風景

も見えている。ドイツ側では人口が減り高齢化しているが、チェコ側では人口が増え、子どもが増えている国境の村も多いという。ドイツ側の「最も美しい村」の幼稚園や小学校でこうした子供たちを受け入れ、地域の教育機能を維持していくことができる。チェコ側の子どもたちにとっては、早くからドイツ語を覚え、ドイツ文化に親しむことで、将来の進学や就労の機会にアクセスできるようになる。国境を越えた、「同じ地域内」の問題解決にも、ザクセンの「最も美しい村」連合は着手しているという。

また、これまでザクセン州を超えた動きになかなか拡大していないということで、ザクセンの「最も美しい村」連合は、世界の「最も美しい村」としては「準加盟」の位置にある。それが近年、近隣のフライデンプルグ州の歴史遺産村協会 (Historische Dorfkerne im Land Brandenburg) に加盟する11村と連携したほか、ザクセン・アンハルト州とも連携協議を開始している。その認知とネットワークが拡がりはじめている。

〈ドイツ〉の「最も美しい村」の結成は近いのか。これからの可能性について、コルフは次のように展望している⁽³⁷⁾。

いま、ドイツ全体で、「最も美しい村」の候補として180村をリストアップしている。それぞれの州で、それぞれの土地の文化を象徴する地域資源を選定した。州を越えてネットワークを拡大するのはとても難しかった。しかし、10年間活動したことで様々なかたちで認知され、信頼されてきている。ザクセンの「最も美しい村」から、「私たちの村には未来がある」に選出される村も出てきた。ザクセンの「最も美しい村」の考え方を、ドイツ国内に向かって改めて紹介することで、それぞれの州で守る文化、生活の遺産、認定の基準や評価方法、品質管理についての対話を行い、考え方を統合していきたい。

ザクセンの「最も美しい村」は、いまのところ、「地域」の本格的な生成／あるいは再生の途上にある。「地域」の再生から、交流へ。「移動」によって特徴づけられたドイツ東部では、その混ざり合う文化が地域資源であり、それは冷戦という社会構造変動にも耐える強さをもったものである。その村に「今」暮らす人々が、住む場所を修復し、自身の生活をつくり上げていく。再

生の過程で過去を受け取り、今を表現していく。それが未来を指し示す。自分たちの村を、自分の暮らしを、修復し、再生することから、また歴史を積み上げていく。そうした暮らしの手ごたえが人々の生きる力を育み、地域の力を生み出している。ザクセンの「最も美しい村」を訪れる時、私たちは、この丁寧な強さと出会うのである。

【付記】本稿は科研費若手研究（課題番号：18K14538）の研究成果の一部である。

【注】

- (1) ザクセンの「最も美しい村」へは、2018年3月7日～10日と、2019年9月23日～10月2日にフィールドワークを行い、ザクセンの「最も美しい村」連合の運営メンバーへのインタビュー、加盟村の訪問と地域資源評価、加盟村の村長や中心メンバーへのインタビュー、資料収集を行った。2019年のフィールドワークでは、加盟村以外の農村にも訪問・宿泊し、ザクセンの「最も美しい村」を比較の視点から捉えられるよう工夫した。フィールドワークの記録は、フィールドノーツにまとめ、不明な箇所や追加で確認が必要となったものについて、メールで連絡し、回答を得てデータセットを完成させた。
- (2) 高谷好一、1997、『多文明世界の構図——超近代の基本的論理を考える』、中公新書：12頁。
- (3) 高谷好一、2010、『世界単位論』、京都大学出版会：158頁。
- (4) 高谷、2010、前掲：158頁。
- (5) 高谷好一、1993、『新世界秩序を求めて——21世紀への生態史観』、中公新書：10頁。
- (6) 高谷、1997、前掲：8頁。
- (7) 立本成文、1996=1999、『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み（増補改訂）』京都大学学術出版会：315頁、カッコ内及び下線部は筆者加筆。
- (8) 社会経済史を専門とする川勝平太は、高谷との対話のなかで「地域間関係がない」、「歴史変化を読むという点では弱い」として「世界単位」論に批判を加えている（川勝平太、1999、「ヨーロッパを作った東洋のインパクト」、高谷好一編、『〈地域間研究〉の試み（下）——世界の中で地域をとらえる』、京都大学出版会：135-158頁）。これに対して高谷は、2005年～2015年にかけて、郷里の滋賀県野洲デルタを一つのベンチマークとしつつ、日本各地、東アジアでのフィールドワークと考古学的な資料収集を集中的に行い、日本列島の文明生態史を解き明かそうとしていた。高谷自身による「世界単位」論の到達点は、『世界単位日本——列島の文明生態史』

(高谷好一, 2017, 京都大学出版会) となった。その「世界単位」日本の地域研究を基に、高谷は、〈地球文明学〉を構想しようとしていた。この研究を読み解く用意はまだない。今後、東アジア、北東アジアのフィールドワークや経験的な研究を蓄積しながら、稿を改めて研究したい。

- (9) 高谷好一, 1997, 前掲:10頁, カッコ内は筆者加筆。
- (10) 高谷, 2010, 前掲:177頁, カッコ内は筆者加筆。
- (11) 高谷, 2010, 前掲:168頁。
- (12) 高谷, 1997, 前掲:158-161頁。
- (13) 鯖田豊之, 1994, 『ヨーロッパ封建都市——中世自由都市の成立と発展』, 講談社学術文庫:219頁。
- (14) 高谷, 1997:160頁。
- (15) 高谷, 1997:158頁。
- (16) 鯖田豊之, 1989, 『世界の歴史9 ヨーロッパ中世』, 河出書房新社:29頁。
- (17) 鯖田, 1989, 前掲:33頁。
- (18) 鯖田, 1994, 前掲:153-155頁。第2次世界大戦時にヒトラーが、大ドイツ主義の思想的基盤としてこの「東ドイツ植民運動」を再提起し、強力に支持したことから、反省の対象ともなっている。
- (19) オーデル・ナイセ線以東より追放されたこれらの人々の多くは、農村部に収容された。ソ連占領地区の人口の約25%を占めた(河合信晴, 2020, 『物語 東ドイツの歴史——分断国家の挑戦と挫折』, 中公新書:17頁)。合わせて注25を参照。
- (20) エーハルト・ノイベルト, 山本一之訳, 2010, 『われらが革命 1989年から90年——ライプツヒヒ, ベルリン, そしてドイツの統一』, 彩流社。
- (21) 歴史地理学には断面堆積法がある。中世ドイツの建設都市(植民), 封建制, 複合民族主義, 国家主義, 社会主義, 東西ドイツの統合といった時間の堆積を空間から読み解く研究アプローチである(加賀美雅弘, 1991, 「景観にみる東ヨーロッパのドイツ中世植民」, 『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』第42号:61-70頁)。近年, 1990年代のドイツ統一の市民運動と国家間関係を包括的に捉える研究も出てきており, 多層的な研究の発展が期待される(例えば, アドレアス・レダー, 板橋拓己訳, 2020, 『ドイツ統一』, 岩波新書)。
- (22) Les Plus Beaux Villages de France ed, 2012, “LES PLUS BEAUX VILLAGES”: DE L’EXPÉRIENCE FRANÇAISE AU DÉVELOPPEMENT INTERNATIONAL: Les facteurs clés de succès pour créer un réseau national de Plus Beaux Villages, Atout France: p. 10.

- (23) 藤本穰彦, 2021, 「フランス・日本・ベトナム(メコンデルタ)における『最も美しい村』の農村資源計画評価の比較研究——『世界単位』論(高谷好一)アプローチ」『東アジア研究』第29号:1-18頁。
- (24) 2019年9月30日のインタビュー。
- (25) 2019年10月1日のインタビュー。このようなコルフの見解は、ドイツの地域経済論を専門とする加藤浩平の論考でも検証できる(加藤浩平, 2013, 「ドイツ統一と東ドイツ経済の変容」, 第48号(2):1-20頁)。農地については、第二次世界大戦での敗戦直後の1945年6月に、スターリンの指示で土地改革が実行された。農業史家の足立芳宏によれば、大地主の解体と社会主義的な農村再編はソ連軍の主導で急速に行われ、オーデル・ナイゼ線以东から追放された難民やこれまで農業に従事していない者にも土地が配分されたという(足立芳宏, 2011, 『東ドイツ農村の社会史——「社会主義」経験の歴史化のために』, 京都大学出版会)。
- (26) 高谷, 2010, 前掲:166-167頁。
- (27) 例えば、日本の農山村では、集落水道の共同管理がコミュニティの持続可能性を診断する指標になる(藤本穰彦・伊東さの子, 2018, 「人口減少の山間地域における『集落水道』問題——安倍川源流域の静岡市梅ヶ島地区の調査から」『社会環境論究』第10号:51-74頁)。またインドネシアでは、キンチール(Kincir)という方法で行う水のエネルギー利用が、住民の地域資源学習の機会となり、地域づくり価値が生み出されている(藤本穰彦, 2017, 「インドネシアの小水力発電にみる内発的發展とキー・パーソン——適正技術の選択と学習のデザイン」『社会環境論究』第9号:33-53頁)。今回の研究では、ドイツ東部の農村コミュニティの中心(エートス)にあるものを、こうした「地域の水」とは別の視点から描き出す必要があった。
- (28) 鯖田, 1997, 前掲:227頁。
- (29) 鯖田豊之, 1983, 『水道の文化——西欧と日本』, 新潮選書。
- (30) 2019年9月28日のフィールドノート。
- (31) 東西ドイツ合併後の東ドイツから西ドイツへの人口移動について、1989年11月9日から2005年までの間に、3,183,851人が移住した(河合, 2020, 前掲:64頁)。知識人やホワイトカラー、技術者を中心に、仕事の機会を求めた若者の社会移動が中心要因であったこともあり、旧東ドイツでは、高齢化と農村・地方都市の空洞化、地方財政のひっ迫という社会問題が複合的に生じていた。ドイツ全体としても、北から南へ、東から西へという産業立地と経済状況に応じた人口集中の傾向があり、東欧からの移民流入も続く(加賀美雅弘, 1995, 「ドイツ統合にともなう東西

ドイツ間の人口移動——とくに旧東ドイツ地域からの通勤者の事例』『新地理』第42号(4):13-27頁)。

- (32) 2019年9月28日のフィールドノート。
- (33) 1970年代の後半, エーリッヒ・ホーネッカーの社会主義統一党は, ソ連からの原油供給を前提に経済計画を組み立てていた。1970年代後半以降, ソ連から原油の供給を受け, その石油加工製品を西ドイツ等の西側諸国に輸出することで外貨を稼いでいた(河合, 2020, 前掲:201-203頁)。ソ連からの原油供給量の大幅縮減は東ドイツ経済の基盤に打撃を与え, その対応からも石炭化度の低い褐炭が大量に掘り出されていく。以降, 経済と環境が共に悪化していく過程をたどる。
- (34) 小林浩二, 1993, 『統合ドイツの光と影』, 二宮書店:174-180頁。
- (35) 2018年3月10日のインタビュー。
- (36) 加賀美雅弘, 1994, 「国境開放による旧西ドイツ国境地域の変容——チェコとの国境地域についての研究事例にみる」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』第45号:55-65頁。こうした外国人労働者の問題は, 1980年代の西ドイツでもあった。例えば, ギュンター・ヴァルラフ, マサコ・シェーンエック 訳, 1987, 『最底辺——トルコ人に変身して見た祖国・西ドイツ』, 岩波書店。
- (37) 2019年10月1日のインタビュー。

(ふじもと ときひこ/明治大学政治経済学部准教授/fujimoto@meiji.ac.jp)